KSKS ちいろばだより 256

二〇〇〇年十二月十二日　第三種郵便物承認　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行

「人の痛み」

ちいろば会理事長 大澤 星一

新しい年2024年が始まりましたが、お正月早々の、皆で楽しく過ごしていただろう１日の午後に能登半島地震が起き、それから大変な様子が連日新聞やテレビのニュースで報道されています。奈良でも大きく揺れたので、誰もが怖い思いをしただろうと思います。この地震で亡くなった方は、200名を超え、避難している人は2万人近くいます。

いつもと違った生活にうまく馴染めない人や、沢山の人がいるところで過ごすことが出来ない人や、自分の気持ちをうまく伝えられない人も沢山いて、早く安心して過ごせるようになればと思います。

人の痛みや苦しみ、悲しみというものは、厳密に言えば、その人にしか分かりません。痛いだろうな、悲しいだろうなと、その人の気持ちを想像することは出来ますが、どれだけ痛いかということを知ることは出来ないのです。例えば、針で指を突いてしまった人がいて、同じように、自分も同じ個所を針で突いてみます。そうすることによって、針で指を突いたら痛いといういうことは分かります。でもその人がどれだけ痛かったかということが分かった、ということにはならないのです。痛みだけではなく、苦しさや、悲しさや、大変さも。逆に言えば、喜びも楽しさもそうだと言えるでしょう。これは、痛みや悲しみや喜びという感覚は誰かと比べる相対的なものではなく、絶対的なものだからです。

だから、悲しんでいる人や苦しんでいる人の、その原因を聞いて、「そんなの大したことないよ」とは決して言えないし、簡単に「分かるよ」とも言ってはならないのです。

しかし、聖書にはイエスの人々に対する表現として使われている言葉として「深く憐れむ」という言葉があります。これは「腸がよじれる程苦しい」という表現で、沖縄の言葉で「チム（肝）グリサ（苦しい）」という言葉と良く似ていると思います。どちらも、自分がどれだけ苦しいかという時に使う言葉なのではなく、特に相手や向き合っている人の苦しみを聞いて、それを知って「深く憐れむ」「チムグリサ」と言うのです。

イエスだけは、人の痛みを知り、自分のものとし、同じように苦しんでくださる方だということです。私たちはイエスのように、人の痛みを知ることは出来ません。でも、痛いだろうなと想像することは出来ます。もちろん喜びや嬉しさも。そして、そう想像すること、思うことがとても大事なことなのだと思います。そんな風にして歩んでいけたらと思います。

ご存知ですか？○○代行サービス…

ちいろば会事務長　和田　泰子

世間には○○代行サービスと言われるものがたくさん存在しています。多くの人が一度は耳にした事のあるものに、家事代行サービスや運転代行サービス、電話代行サービス、コロナ禍で注目された墓参り代行サービス等があり、個人や企業の代わりに仕事や業務の一部を行うサービスの種類は多種多様に拡がり続けています。

そして、代行サービスの中でも近年利用者が急増している退職代行サービスというものがあるのですがみなさんご存知ですか？私がこのサービスを初めて知ったのは 5～6 年程前に見たテレビの特集番組でした。その特集を見たとき、様々な理由から退職代行サービスを利用しないと退職の意思を伝えられない人がいることに驚きました。しかし、退職したくても辞めさせて貰えない会社もあることは知っていたのでそういう会社に勤めている人が退職するために利用するのだろうと思っていました。実際サービス開始当初はそういった会社からの退職に利用するものだったのかもしれませんが、現在はどのような会社からの退職でも退職代行が利用されるようになっているのです。本来退職とは上司に退職意向を伝え、退職願いを提出し引継ぎを終えて退職日を迎えるのが一般的な流れのはずですが、ルールを無視したシステムとして登場してきたのが退職代行サービスなのです。このサービスは従業員の退職意思を退職代行の会社から電話で職場へ伝え、辞めたいと思ったら即日退職ＯＫ！というのです。

昨年ちいろば会でもこの退職代行サービスを利用して複数名の職員が退職していきました。あるデータによると、退職代行を利用して、退職を申し入れてくる多くは入職 3年以下の従業員で、辞めていく者に共通していることは、その多くが前日まで何も変わりなく就業していたというのです。その為、ちいろば会もそうでしたが会社側にしてみれば困惑しかないというのが正直なところです。ちいろば会でも残された職員に業務がのしかかり、現場を監督する者は日々の職員配置に苦慮していることは言うまでもありません。また、利用者のみなさんは、突然職員が出勤してこなくなり退職したと聞かされても到底理解することができず不安な毎日を過ごすことになります。予定していた活動、楽しみにしていた行事ができなくなる等本当に迷惑を掛けられたという気持ちしか残らないのです。

どのような事情があるにせよ、入職した縁、共に働いた縁はあるはずです。だからこそ、せめて退職代行を使わずに退職意思を直接伝えてもらい、「今までお疲れ様でした。」という気持ちで送りだせるような関係で終われることを願います。

しかし、今後も退職代行を利用する退職が無いとは言いきれないので就業規則に退職代行の利用に関する規定を設ける等、対策を考える必要があるのかもしれません。

―ぼくも わたしも みんなが主役―

質問①　名前と年齢は？
質問②　今はだれとどこで暮らしていますか。
質問③　家族にまつわるエピソードは？
質問④　学校、就労時代のエピソードは？
質問⑤　最近気になっていること、興味があることは？

① 西村　周也　　39歳です。
② グループホーム日之出荘のなかまと暮らしてます。
週末には、お母さんのいる自宅へ帰ることが多いです。
③ お父さんは早くに亡くなり、週末にお母さんと過ごすのが好きです。
日帰りバスツアーにもお母さんと一緒に参加しています。
④ 学校は小学校から高等部まで奈良養護学校で過ごしました。いとこと同じ小学校へ行けなかったのが淋しかったです。
でも、養護学校では修学旅行や水泳大会にも参加し、いろんな経験ができてうれしかったです。
⑤ ライトアップに興味があり好きです。夜なので車の中から観てます。
いろんなものをさわったり、手で感じることがしたいです。
友だちとも話しがしたいです。

① 田口　由里子　　41歳です。
② 実家でお父さん、お母さんと暮らしてます。
③ 昨年10月にちいろば旅行で行った福井県に家族でもう一度、旅行にいきました。とても、楽しかったです。
④ 小学校、中学校は地域の学校、高校は奈良県立高等養護学校を卒業しました。
高校では、友だちといっぱい出会えて楽しかったです。
小学校や中学校は楽しかったけど、三者懇談で「いらない物をもってきすぎ」「迷惑かけてる」と先生に叱られてつらかったです。
高校卒業後、田原本にある電子レンジをつくる会社で働いていました。そこでは、いっしょに大衆演劇を観に行く友だちもできました。
⑤ いつかは、一人暮らしをしたいと思っています！恋人とデートでごはんや遊園地に行ったり、おもしろい経験をいっぱいしたいです。

環境の変化

ちいろば園職員　笠井　草太

急な環境の変化、イレギュラーな事態は誰にとっても対応に苦しみ「大丈夫かな」と不安にさせる要素の１つだと思います。昨日まで当たり前にあった日常がいきなり変化するのですから誰しも不安になり、心が乱れます。特に自閉スペクトラム症の方はそれが顕著に表れます。

ちいろば園の利用者さんの中にも当該の方がおられます。日々の日常の中での小さな変化でさえ心が乱れる為、体を揺らしたり、毎日行うルーティンによって心を落ち着かせようとされます。それでもどうしたらいいかわからない不安や苦しみが治まらないときに、強度行動障害の状態になることがあります。（危険につながる本人や周囲の人の暮らしに影響を及ぼす行動）

昨年末、複数の職員が同時に突然来なくなり、連絡もつかず退職するという事がありました。前触れもなく昨日まであったものが突然いなくなる、明日は来るのかわからないということは障害当事者にとってはたまらなく不安なのです。私の担当する部門に所属されている利用者の方がそのたまらなく強い不安によって水を撒く、私や主任の腕を噛む行動がありました。

その時の当該の方は本当に苦しそうで、腕を噛まれた時のその痛みが、そのまま本人の苦しみの強さを物語っていました。その時の私はとにかく心が安定するならとただ受け止めることしかできず、心苦しかったです。その方は今でも表情が硬く、本人なりに落ち着こうと日々過ごされています。顔色も良くなく、どうにか不安がこれ以上強くならないように今後の予定や職員の配置等を視覚的にもわかりやすく提示し、曖昧な表現はせず、丁寧に説明することで本人の不安、しんどい気持ちが強まらないように務めています。

ちいろば園で支援者の職に就いた瞬間から、私はちいろば園に通う利用者さんにとっての環境の一部になりました。強度行動障害支援者養成研修を受講した際、最初に説明があった支援の専門家が支援を提供する際に必要なものは　1.気持ち　2.気力・体力　3.知識　4.技術　この４つです。すべて必須の要素です。福祉の職に就くとは、人々の幸福で安定した生活を達成するための支援を行うことです。その意味を理解し、自覚をもって日々過ごさなければなりません。私には足りない要素がまだまだたくさんあるからこそ日々誠実に利用者さんと向き合い、支援者としての自覚を忘れないようにしたいです。

～　私がこの仕事をして思うこと・・・　～

グループホーム職員　新居　澄江

この仕事をするきっかけとなったのは、ちいろば会が利用者の自立を目指し、それを理念にかかげられ運営されている事に共感したことでした。ただ今まで介護や支援に携わった事がなく、何の知識も経験もない私に何が出来るのか不安でしたが、何か少しでも役に立てればと思い今の仕事に就きました。

入った当初、世話人の方や職員の方々から仕事の内容を一から教えて頂きました。私にとって、利用者さんとのコミュニケーションをとる事が最初の課題でした。また職員が利用者さんとかかわるのを見て、信頼関係を築くことの大切さを知りました。そこで、信頼関係を築くにはどうしたらいいかを真剣に考えました。その為にはまず、利用者さんのことをよく知る事と、私のことを知ってもらう事から始めようと思いました。そこで利用者さん一人一人とかかわりを持ち、どのように接してほしいと思われているのか、それに答えるにはどうすればいいのか?を考えました。そこでわかったのは、一人一人支援の仕方が違うこと、個別に向き合うことの大切さでした。そうしているうちに利用者さんの視線を感じるようになりました。私にとって嬉しい瞬間でした。そこで視線を感じたら「どうしたの」と声をかけるようにしました。声が聞こえなくても一生懸命耳を傾けるようにしました。

支援の仕事は、利用者さんの信頼を得てこそ前に進める仕事だと思います。今、私は利用者さんとかかわる中で、たくさんの経験と同時にたくさんの勉強をさせて頂いています。距離感に配慮し、本人の気持ちに寄り添いながら、常に利用者さんの立場にたって考えるよう心がけています。ただ単に手を貸すのではなく、見守りながら必要に応じて手を差し伸べること、出来ることを今より少しでも増やし、出来た時の喜びを知ってもらい、それが将来の意欲と希望に繋がればと思い仕事をしています。

日々の仕事を通し、学ぶ事もたくさんある中で私自身も成長し、利用者さんが将来自立した生活が送れるようによりよい支援を目指し、今後一層の努力を重ねていきたいと思います。私に出来ることは限られていますが、朝に出勤して利用者の皆さんの元気な姿を見ると、この仕事をしていて良かったとつくづく思います。

「原さんとのおもいで」

ちいろば園職員　新宮　由士

去る 12月4日ちいろば園利用者の原武史さんが逝去されました。原さんは長年透析治療をしており、ここ最近は血中の酸素飽和度が低く酸素吸引も必要な状態でした。その後調子を崩して入院し療養中の病院で息を引き取られました。お通夜ではちいろば園やグループホームでの原さんの写真がたくさん飾られており、原さんとの色んなおもいでが込み上げてきました。

原さんは、私が入職して間もない時からよくかわいがって？くれていたように思います。お気に入りの漫画をみせてくれたり、手に落書きされたり・・・きっと若いにいちゃんがきて遊んであげようという気持ちだったと思います。私の名前を真っ先に覚えてくれたのも原さんでした。原さんが描いてくれた絵には、よく私の名前も一緒に書いてくれてうれしく思っていました。

私が原さんの入居していたグループホーム勤務になった時、はじめなにより苦戦したのは夕食づくりでした。悪戦苦闘している私に、よく原さんは一緒になって下準備をしてくれました。本当は味見することが目的だったと思いますが、それがどれだけ心強かったか、みんなでおいしそうにご飯を食べている姿がほんと数日前のように感じてしまいます。

衣替えの時期、原さんの部屋で一緒に衣類を仕舞い、新しい衣類を取り出して次の日に着る服を決めてもらい部屋を出るのですが、夜中、部屋から「ごそごそ、ごそごそ」と音が聞こえてきます。次の日の朝、昨日一緒に仕舞ったはずの服で部屋から出てきたときは「え～なんで」と嘆いてしまいました。またある日は、朝ちいろば園へ行く時間になり、何度声を掛けても布団から出てこれず、バスの時間に間に合わず車で送迎することもよくありました。これらの時は、決まって原さんは少ししてから片手を縦にしてごめんと謝ってくれるのです。いやいや違うんです。本当に謝るのは僕の方です。自分の支援が未熟だったからですといつも心に思っていました。

原さんと出会い 10数年が経ちました。原さん僕はただの若いにいちゃんから支援者に少しでもなることができていたでしょうか？

食べることが大好きな原さん、透析治療のため水分、食事制限があり、つらい思いをされたと思います。本当に最後までお疲れ様でした。天国でおいしいものをいっぱい食べてくださいね。原さんは私たち支援者に利用者として、そして一人の人間としてたくさんのことを教えてくれました。本当にありがとうございました。

最後に、原さんのご家族の皆様、ちいろば会職員の私たちを最後まで心から信頼して頂きありがとうございました。原武史さんのご冥福をお祈りいたします。

― 法人職員研修報告 ―

2022年度から2023年度は、法人職員研修として、「性の多様性を知って考える」をテーマに4回の連続講座を「性と生を考える会奈良」代表　中田ひとみさんに依頼して、学んできました。
今回で最終となりましたが、今回の連続講座を通して、日頃、他人と話す機会の少ない性の問題の奥深さを知ることができました。今後も学び続ける必要のあるテーマであると感じています。　富田

今期の法人研修のテーマは「性の多様性について」でした。テーマを聞いた時、私は、男と女、それから性同一性障害（自分の認識と戸籍上の性別の不一致）程度の認識でした、しかし、講義に参加して、「性の多様性について」まず、学んだことで、自分の認識、知識不足を知りました。性の多様性を大まかにわけると
１．身体性別　２．性自認　３．社会、文化的性別　４．性的思考（同性愛者が必ずしもトランスジェンダーとは限らない）という内容で驚きも多くありました。

また、グループディスカッションにて自分達のテーマは「トランスジェンダーが入職した場合」について話し合いました。

1，問題と思うことがそもそも問題では？（トランスジェンダーだからと身構える事が問題）
2，職員の理解を深め、そこから利用者へ多様性が自然なものであるという職場にすることで、利用者にも自然なことだと理解してもらう
3，同性介助の同性は見た目なのか、自認識なのか（これについては具体的な解決案はでず）
4，保護者からの反発が考えられる

などの意見が出て、それぞれについて話し合いましたが、明確な答えが出ることはありませんでした。

これだけでも、トランスジェンダーだからという事で社会での暮らし辛さが浮き出る事となりましたが、しかし、さらに講義を聞いていく中で、同性婚・パートナーシップ問題にトイレ問題、通院に不安があるなどの社会的、法律的な問題も出てきました。

以上のことから「性の多様性」については、自分達だけではなく、一人でも多くの人に正しい認識と知識を広めていく必要性を感じました。また、講義の中で一番驚いたのは、世界的に見た場合、宗教によって差別の対象とされること、大罪として扱われている国が多いという現実に驚きでした。近年ではニュースなどでトランスジェンダー関連の話題も多く、いつ、身近で「性」について悩んでいる人、や相談があってもおかしくないので、「性の多様性」について、他人事とおもわず、一人でも多くの人が関心と正しい知識と認識、を身に着け、「性」について悩まれている方が一人でも生きやすい世の中になればいいなと思いました。

グループホーム職員　菅野　努

性の多様性について、4回に渡る研修及びディスカッションを重ねた上で、私自身に足りなかったと感じる部分。それは彼らに対する配慮が無かった事ではないかと思う。

私と交流のある性的マイノリティの方達は、所謂「良い人」であったため、容易に受け入れられたが、今まで彼らと交流するに当たって、相応の配慮をしていたであろうか。深読みが過ぎるかもしれないが、私自身は彼らと楽しく過ごしていると思っていた時間でも、「やはり理解してもらえない」と感じさせ、苦悩させていたのかもしれない。研修を受けた今感じるのは、彼らの普段見えない困り事に、無意識ながらも目を背けていたのではないか、もっと理解を深めていれば、彼らの不安に寄り添えるのではないかと感じる。

普段の生活をしていて、本人から言われない限り、誰が性的マイノリティの方なのかは分かり難い事が多いと思う。だが、見た目では分からなくても、必ず存在しており、分かり難いという事は、隠し続けなければ自分を守れない社会的環境があるのだと思う。その環境を変えて行くのは他でもなく、研修を受けた一人一人であろう。今後、こういった研修や教育を受ける機会が増え、一人でも多くの理解者が増え、誰もがありのままの自分を表現出来る社会となる事を願う。

ちいろば園職員　宮田　峰泰

☆後援会費・ちいろばだより年間購読料（2023年10月1日～2023年11月30日）
ご協力ありがとうございました。

篠原範子、髙倉常子、塚本智恵子、ガールスカウト OB、藤澤信弘・ゆき子

以上　敬称は略させていただきます

本年、1月1日に、石川県能登地方で発生した地震により、甚大な被害が発生しています。被災されたみなさまはじめ、ご家族、関係者のみなさまには、心よりお見舞い申し上げます。

本来であれば、本法人から被災地への人的な支援等も考慮すべきところではありますが、残念ながら、現状において、本法人として何らかの対応に取り組む余裕がないまま、今日に至っています。既に多くの機関からの支援が行われていますが、障害者関係においては、「ゆめ風基金」が「ゆめ風ネット加賀（ひまわり教室）」を中心に情報収集、救援活動を開始しているとの情報も得ています。

近日中には、本法人からも「ゆめ風基金」への救援資金のご協力をみなさまによびかけたいと考えています。

一刻も早く、ご支援をご考慮いただけるみなさまには、「ゆめ風基金」のホームページをご覧いただき、ご支援、協力をお願いします。

※ 本来、本号の巻頭文は木ノ脇悦郎理事にご担当いただくところですが、木ノ脇理事の体調不良により順番を入れ替え、大澤理事長にお願いしました。木ノ脇理事のご快復をお祈りしています。

※ 本号の寄稿内容にもあるように、ちいろば園の複数の職員の急な退職によりちいろば園の活動のあちこちに支障が生じています。
利用者のみなさま、ご支援いただいているみなさま、取引先等多くのみなさまにご迷惑をおかけしていることをお詫び申し上げます。

KSKS　ちいろばだより

編集人／　ちいろば会後援会　　年６回　頒価　50 円
連絡先／　奈良県生駒郡三郷町勢野北５－６－１４
TEL：0745-72-1923 FAX：0745-72-1924
発行人／　関西障害者定期刊行物協会
大阪市天王寺区真田山町２－２　東興ビル４Ｆ

二〇〇〇年十二月十二日　第三種郵便物承認　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行